

## いのちをつくるものとは

(原文)

長谷川 彩華 (17 歳)

東京都

桐朋女子中学校・高等学校

去年から今年にかけて、私は犬を 2 匹飼い始めた。彼らは、野生に生きず、わたしたちの下で、私たちの家族として、人間のような生活をしている。ご飯を与えられ、互いに遊びあったり、歯磨きをしてもらったり、排せつ物を片付けてもらっている。彼らは、私たちや、仲間なしでは生きていけない。

子ども・大人問わず、人間も同じだ。「いや。人間は一人で何でもできるだろう」そう反論したい人もいるかもしれないが、はたしてそうなのだろうか。

日本語には「一匹狼」や「ひとりぼっち」のように、独りでいる人を表す言葉が存在する。しかし、彼らにも家に帰れば家族がいる。たとえない場合でも、ご飯を食べにお店に入れば、「いらっしゃいませ」と迎える人、つまり、思いやってくれる人がいる。

「いのち」とは、思われているもの、そして思われ続けられているほど存在しうるものである。私の周りに、思われ続けながら、頑張っている人がいる。私の祖父だ。

私の祖父は、二度死にかけたことがある。二回とも、いのちがもう少ないといわれ、祖母と私の母、そして母の兄弟が呼び出された。コロナ禍であったこともあり、私と妹は病院へ行くことができなかったが、思い続けることはできた。思い続けるうちに、祖父はまだ生き続けているという確信を持つようになった。

確信は、本当だった。それからは、どんどん祖父の容態は良くなり、自力で歩けるようにまで回復した。私は今も、容態が良いままであるように、ずっと祖父のことを思い続けている。

一方で、私が思いやっていると伝えたくても、届かない人たちもいる。例えば、コロンビアで税制改定についての抗議を頑張っている人々や、パレスチナで空爆を受けている人々だ。彼らは、生きることに必死な、周りからの思いやり・応援が必要な、いのちである。直接話すことや、手紙を出すことは難しい。そこで、私は、ネット署名や、寄付をすれば、彼らに届くのではないかと考えた。彼らが、「私たちのことをこんなにも多くの人々が思いやってくれているのだ」と実感してほしいからだ。

このようにして相手を思いやることは、私たちからの一方的な思いやりではない。私が思いやっている祖父は、私のことをいつも褒めてくれる。顔を合わせると、いつも嬉しそうだ。祖父も私のことを思いやってくれている。私が寄付をした団体からは、何に役立てられたのかという説明と一緒に、感謝のメールが届いた。そして私が賛同したオンライン署名も、どんどん実行されて行くと共に、「賛同あ

りがとうございました」というメッセージが送られてきた。相手は私の顔も、どんな人間なのかも知らない。だが、感謝と言う形で、思いやりを示してくれた。私は、知らない人から感謝されることが、こんなに嬉しいとは思っていなかった。私の思いやりは、彼らから私への思いやりでもあった。

思いやることは、個人と個人の間でもできるし、個人と団体の間でもできる。時には、実際に会ったことがない誰かによって思いやられていることさえある。誰のいのちも、家族や友だちに限らず、会ったことのない誰かに思いやられてきている。

しかし、生き物には必ず最後が訪れる。死んでしまったら、いのちはなくなるのだろうか。私たちが思いやっているいのちは、いずれ無くなってしまふのだろうか。私はそうは思わない。「いのち」はなくなってしまうても、誰かがその人のことを思い続けることで「いのち」は存在し続けると思う。思い続けられれば、彼らとの思い出は消えないし、私たちは彼らが生きていたという生き証人になるからだ。

私たちが、「いのちとは互いに思いやることであり、思い続けることは、いのちの消失による悲しみをも軽くする」ということを、心に止めておけば、日頃から周りの人を思いやれるようになり、思いやりにあふれる社会が作れるのではないだろうか。思いやりでいのちを守ることは、平和な世界への第一歩である。